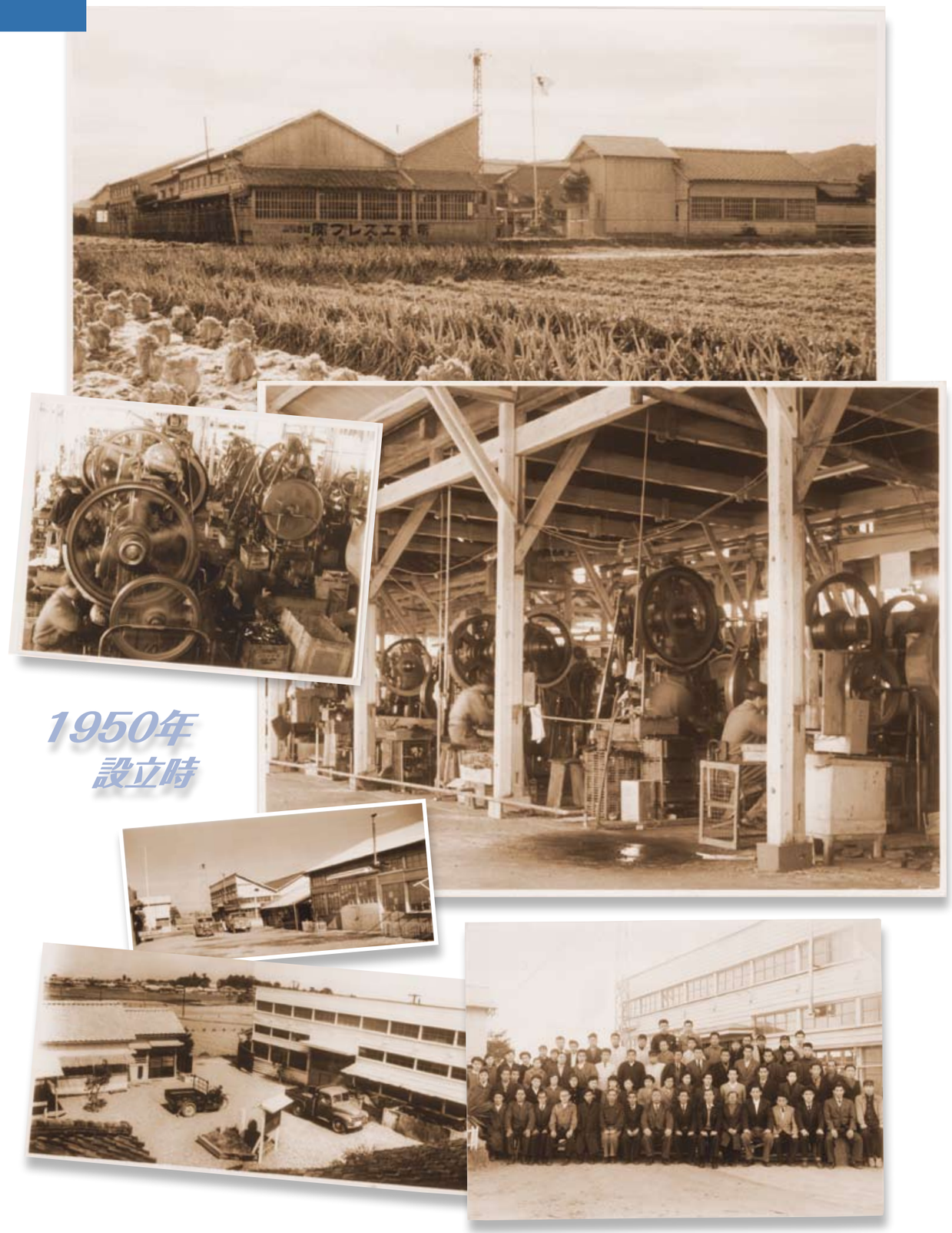
こういう環境で社長を　してるなんて、めったにない経験

株式会社関プレス／代表取締役社長
関　正克氏
せき　まさかつ



決断、判断、行動は当たり前。なにより断行する勇気を――

見えてくるもの

巷間（こうかん）には「危機」という言葉が氾濫（はんらん）している。だが――

「危機という言葉には、危険だけでなく、機会という字も入ってるんだよね」

と、関ちゃんは言う。

「ピンチなんじゃなくて、これをチャンスって捉えることもできるわけ」

株式会社関プレス代表取締役社長・関正克はにんまりと笑った。

「たしかに暇になったよ。でもさ、そうなると、いろいろ見えるようになるよね。売り上げがある時は、気にしなかった支出も、いまは、これがほんとに必要なものなのかって、じっくり見直せるしね」

3代目である。

創業者の祖父・正男さんには、物心つくと工場に遊びに連れていかれ、社長室の大きな椅子に座らされた。

「ウチは会社やってんだな」小学校時代はぼんやりとそう思っていただけの関ちゃんだったが、中学生になるとそれはプレッシャーに変わった。「社長になるために勉強しないといけないな」

そう思うだけで、とうとう机には向かわなかったけれど。

なにしろ落ち着きがなくて、書道、そろばん、学習塾、通ったあらゆる塾から、「もうこなくていい」と言われてしまった。母の智子さんは悲しんだが、当の関ちゃんはせいせいしていた。

勉強はしなかったが、小2から始めた剣道には夢中で励んだ。茨城県内の県北地区と中央地区、両地区の段別選手権では2段と3段で優勝している。結局、剣道は大学4年までつづけた。落ち着きがない反面、こうと決めたら一途なのだ。

おまえとはイチからだ

在京の大学の経済学部を卒業した関ちゃんは、そのまま東京の大手金属会社に就職した。大学のゼミの同級生がその会社の入社試験を受けたことから、引きずられるようにしてなんとなく入った会社だった。

大学で、経済を選んだのも将来会社経営を継ぐことを意識してのことであるようなないような、金属会社に就職したことも修行の意味があったような偶然だったような……

どことなく曖昧だった関ちゃんの運命は、しかし、いやおうなく確定する。就職して2年後、正男さんの後を継いでいた父・迪（すすむ）さんの体調が思わしくなく、郷里に呼び戻されることになったのだ。1994年、関ちゃん24歳の時のことである。

父の片腕となって働くことを決心し、入社して目の当たりにした関プレスの業績は思わしくなかった。仕事のほとんどをもらっていた客先が発注を海外にシフトすることで売り上げが下落していた。

「このままではいけない。なんとかしなければ」

金属会社時代、関ちゃんが籍を置いていたのは営業部。営業という仕事は自分に向いていた。人に会って話をするのが大好きだ。けっして聞き上手などではない。相手にはしゃべらせないのだ。一方的にこちらがしゃべりつづけた。そうして、気がつくと契約が取れている。関ちゃんは、「趣味――お客さんの新規口座を開設すること」と豪語していた。

そんな関ちゃんだったが、関プレスに入って拍子抜けした。会社には営業部門そのものがなかった。

ある日、迪さんに伴われてある客先に挨拶に行った。そこで迪さんが中座した時だ、

「おまえとの付き合いはイチからだからな」

そう相手に言われた。

いま取引が行われているのは“関プレス＝父とスタッフたち”であって、そこに自分は入っていない。

関ちゃんは冷や水を浴びせられた思いがした。

そうなのだ、この人だけではない、関プレスの従業員らにしてもそうだ。いまの自分に対する評価は、なにも知らない苦労知らずの跡取り息子でしかない。

“関プレス＝関正克”にならなければ。そのためには、「商権をとるしかない！」

客先に、「この仕事は、おまえに発注するんだぞ」と言わせるのだ。従業員からは、「正克が商権を取ってきたぞ」そう認めさせるのだ。

関ちゃんのがむしゃらな突進がはじまった。

結婚

よい時も悪い時もあった。

そのなかでも、特に深刻な危機に見舞われたことがあった。現場が一時帰休を余儀なくされていたある日、力を落とした迪さんから自分に代わって同業者の息子さんの結婚式に出席するよう言われた。

披露宴のテーブルを共にした同業社の社長と言葉を交わしていた時だ、関ちゃんが自社の現状について話したところ、数日たって連絡があった。先方の申し出は、実は廃業することを考えているのだが、ついては仕事を肩代わりして請けてもらえないか

2009年 現在

というものだった。ずっと受け皿となるにふさわしい会社をさがしていたのだという。もちろん、関ちゃんは引き受けた。関プレスは、帰休状態から連日残業につぐ残業に転じ、息を吹き返したのだった。

営業を重視するところから東京とベトナムに拠点を開設。自分流を社に吹き込んでゆく。仕事だけではない、酒好きな関ちゃんは、毎日浴びるほど飲んだ。

酒が好き、人と話すことが好きな関ちゃんを、地元の若手経営者らが囲むようになり、いつしかそれは“関派”と呼ばれる会となった。

毎日が仕事と酒で過ぎてゆく。もちろん充実していた。だが、このままではいけない。2005年、35歳の関ちゃんはひとつの決心をする。

「今年こそ結婚する！」

そんな決意をして間もなくのことだ、客先が主宰した合コンで、ひとりの女性と出会う。

「もうピンときたね、彼女と結婚するって」

だが相手のほうはというと、ちっともピンときていなかった。

関ちゃんはその相手、美香さんを何度か食事に誘った。

ある日、関派のみんなに向かって、我慢しきれず、「カノジョができた」と宣言した。

「えーっ!!」関派の面々の驚きの声は、歓喜の祝福へと変わった。

そうして、関ちゃんを慕うこのメンバーは、美香さんの姿をひと眼見んと２人がデートする店に押しかけたのだった。

驚愕する関ちゃん。メンバーには、「カノジョ」と言ったものの、美香さんのほうにはその気もないし、そもそもデートしているつもりもない。

「関さんのどこが気に入ったんですか?」

「結婚はいつ?」といったメンバーからの矢継ぎ早の質問に、美香さんは不思議そうな表情をしていた。

「“なんでわたしが、こんなヒトと付き合わなければいけないの？”って言われたんですよ」関派のメンバーのひとりが、当時のことをたのしげにそうに回想する。

しかし、これであきらめる関ちゃんではなかった。

「そのあとはもうストーカーだったね(笑)」

関ちゃんの一途さはここでも発揮され、根負けした(?)美香さんとゴールイン。決意を実現させたのである。

勇 気

結婚と同時に、関ちゃんは３代目を継承することを迪さんに進言した。所帯を持ったことでさらなる責任感を抱いていたし、関プレスはいつしか関ちゃんの時代になっていた。そう“関プレス＝関正克”に。

「わたしはアナタと結婚したんじゃない、会社と結婚したの」ことあるごとに美香さんはそう言った。聞きようによっては、ただごとではない発言である。

「会社の跡取りだから少しはカネを持ってると思ったんじゃないのかね。ちっとも持っちゃいないけど(笑)」

もちろんそんな意味ではなかった。その言葉に発奮して、関ちゃんは会社を大きくしようとさらにがんばった。

「そうやって、女房にうまく操縦されてるんだよね」

満足そうに微笑む関ちゃんは、

「自分の趣味は“家族”」

と言い切る。

外でいかに苦しいことがあっても、家に帰り、美香さんと語らい、間もなく３歳になる長男の将大くんの笑顔に接する時、関ちゃんは癒される。

「決断、判断、行動は当たり前。なにより断行するっていうのが必要だよね。しかし、行方を見極めたら、断ち切る勇気もなくっちゃね」

いくつかの難局を乗り越えてきた。そしていま、苦境に立っているといえばそうなのかもしれない。

「“100年に一度の経済危機”って言われてるよね。こういう環境で社長になることなんて、めったにない経験なんだから糧にしないと」

関ちゃんは、近ごろ創業当時の写真を眺めることがよくあるという。ネギ畑のなかにぽつんとある有限会社関プレス工業所。なにもないところから祖父が築き上げた工場。旧式のプレス機械が稼動する構内。それらにまじって、初代社長を中心にずらりと関係者らが集う記念写真がある。

そこには関プレスの基盤となった人々の静かな活力がみなぎっていた。そうして関ちゃんのなかには、このひとたちがついているのだという勇気がわいてくる。

（取材・文＝上野（うえの） 歩（あゆむ））

Campany Profile

◆会 社 名　株式会社　関プレス
◆所 在 地　茨城県日立市千石町 4-3-20
◆ TEL ／ FAX　TEL：0294-36-0300
FAX：0294-34-5947
◆設　　立　1950 年
◆資 本 金　4,200 万円
◆従業員数　85 人
◆事業内容
各種金型設計製作、トランスファー・順送・単発プレス加工、溶接 部品組立加工
◆得意＆特異技術
抜シェービング工法、絞成形技術（シェービング応用）、楕円孔シェービングなど

◆注文・製品に関するお問合せ
担当：代表取締役社長　関 正克　TEL：0294-36-0300

シェービングの応用技術（ステンレス部品）